

自分の書きたいことを
楽しみながら書きたい。
でも試行錯誤の連続です。



受賞作品『家^{いえ}』は、自分の土地に一戸建ての貸家を建てるから入居者を募集してほしいと依頼をしてきた58歳の独身男性と大手建築メーカーの32歳の営業マンとのやりとりを中心に話が進みます。

「その人はとても家にこだわりを持っていたんです。その人の持つ土地の周りは立派な屋敷が並んでいる山の中の集落。その中に鉄骨のアパートはそぐわず、周囲に溶け込むような立派な家を建てるのが、その人にとっては自分の生きた証であった。そして故郷を離れていても『一人でちゃんと生活している』という地元の人へのメッセージと話していました。それが心に残っていて、書いた作品です」



にわきょうこ
丹羽京子さん(今池町・61歳)
全国文芸同人会「コスモス文学の会」
が主催する第91回コスモス文学新人賞
の掌編小説部門で奨励賞を受賞

掌編小説とは手のひらに乗るような小説という意味で、短編よりも短く、中には原稿用紙2・3枚の作品もあるようです。受賞作品は原稿用紙で17枚。「文章を学ぼうと通信教育を受けていたんですが、原稿用紙1枚に、例えば「親」とか「人生」という題で文章を書く。起承転結を盛り込み、文章を何回も削り取り、中身を凝縮する訓練を繰り返しました。文章は、無駄がなく行間に読者の空想や想像を抱かせるものがよいと言われます。書き過ぎると面白くないですよ」

会社員の丹羽さんは、早朝から出勤前の2時間、創作し、パソコンに打ち込んでいるとのことでした。

「息子が独立してから本格的に書き始

めました。いつもピンとアンテナを張り、感性を磨いていた。そして心に引っ掛かったもの、書きたいものを吟味し、書くようにしています。フィクション半分、経験に基づくものが半分。頭だけで考えるのではなく、生きた人間の空気をじかに吸って書きたいですね。その方が本音や人間模様が浮かび上がるから。

女性のことを書くとしても感情が入り現実的となってしまうがちです。だから、反対の男性の立場になって、試行錯誤しながら書き進めています」

「書くことはストレス発散にもなりま



受賞作品の背景ともなった
不動産会社で働く丹羽さん